

秋の瀬戸芸開幕、旧港町で「塩」のアート 神社や古民家に作品群 – 瀬戸芸2025

2025/10/03 10:30 日本経済新聞電子版 1445文字

香川・岡山県の離島を主会場とする現代アートの祭典「瀬戸内国際芸術祭（瀬戸芸）」の秋会期が3日開幕した。瀬戸芸2025の集大成となる今会期は初参加の宇多津町と香川西部の島々も会場となる。宇多津町は3万人の来場を見込み準備を進める。

秋会期は11月9日までの38日間。通期で作品を展示する直島や小豆島に加えて、伊吹島（香川県観音寺市）や高見島（同県多度津町）といった島しょ部、沿岸部の宇多津町が会場となる。

香川県の池田豊人知事は9月16日の記者会見で「秋会期はこれまでの実績を見ても最も入場者が多い」と話した。来場者数最多だった19年は全体の40%ほどが秋の来場だった。今年は春・夏会期合わせて約60万人が来場し、秋も多くの来客が見込まれる。

宇多津町、かつて日本有数の塩の産地

初参加の宇多津エリアは「塩」と「古街（こまち）」がテーマだ。江戸時代から昭和にかけて、塩田とともに日本有数の塩の産地として栄えていた歴史をもつ。「古街」は同町の旧港町エリアを指す名称だ。現在は内陸に位置しているが、1972年に塩田が廃止され、埋め立てられる前は港として栄えていたという。

作家の山本基氏は昭和初期の古民家に瀬戸内産の塩を用いて潮の流れや漁網などを連想させる模様を描いた。宇多津町という港町が持つ製塩業の歴史や文化を浮かび上がらせる。

シンガポールの作家ゼン・テー氏は、コラージュ技術などで自然とのつながりを感じられる空間を神社内に作り上げた。「人々は常に慌ただしくしている。自然の現象や、身の回りにありふれているけれども意外と見えていないものを見つけてほしい」と話した。

宇多津町での開催に合わせ、瀬戸芸実行委員会は5日に塩にまつわるトークイベント「塩サミット」を開く。製塩業のナイカイ塩業（岡山県倉敷市）の野崎泰彦会長らがゲスト出演する。春・夏のイベントに続き、今回が本開催となる。

四国水族館やゴールドタワーなど人気施設が集まる臨海部エリアには西澤利高氏の「色のない翼の彼方」を設置する。土台部分は高松市特産の庵治（あじ）石、アクリル板はNIPPURA（香川県三木町）と香川にゆかりのある素材を使った。

無料臨時バスや地元グルメも

宇多津町は受け入れ体制を整える。3万人という来場者見込みは今年初参加で夏会期限定だった沿岸部の引田、志度・津田エリアの実績を参考にした。観覧の所要時間は古街のみで90分、全作品で120分程度を想定する。開催時間は20時まで。

交通面では古街エリアの公園を利用して約180台分の無料駐車スペースを設けた。JR宇多津駅や各エリアを周回する臨時無料シャトルバスも毎日運行する。土日祝日は丸亀港などを結ぶ広域バスも巡回するため、他会場の島しょ部からの周遊も見込める。

瀬戸芸秋会期は宇多津町などが会場に加わる



「食」も重要な要素と捉え、地元でなじみの味覚を期間限定で販売する。宇多津町の郷土料理である鯖（さわら）の押しずし定食や、「漁師飯」として親しまれてきたたご飯などをとりそろえる。宇多津町婦人会や宇多津漁業協同組合などがボランティアで提供する。

既存の飲食店も瀬戸芸来場者向け割引など実施する。展示作品と同じ建物に店を構える「蔵カフェこうらく」は通常は昼までの営業だ。会期中の一部日程で夜の営業も始める。通常は1日20～30食を想定して仕入れるが会期中は最大50食程度を想定する。土日祝日はテイクアウトで弁当も用意する。

同店の代表は「訪れる人に宇多津のことを知ってもらい、町全体が盛り上がればうれしい」と期待を込めた。

（岩田優羽）

【関連記事】

- ・瀬戸芸2025徹底解説！ 全256作品レビュー 宇多津など加わる
- ・世界の芸術、裏方でつながる瀬戸芸「こえび隊」 記者が創作支援体験
- ・瀬戸芸こえび隊、「島キッチン新聞」配って10年 会期外も
- ・瀬戸内国際芸術祭、心に迫る平和への祈り 2025夏の新作

本サービスで提供される記事、写真、図表、見出しその他の情報（以下「情報」）の著作権その他の知的財産権は、その情報提供者に帰属します。
本サービスで提供される情報の無断転載を禁止します。
本サービスは、方法の如何、有償無償を問わず、契約者以外の第三者に利用させることはできません。
Copyrights © 日本経済新聞社 Nikkei Inc. All Rights Reserved.

許諾番号NK000108 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。